

令和 5 年 5 月 31 日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2022

課題番号：19K23034

研究課題名（和文）スラヴ諸語の音韻体系における最新実態の解明

研究課題名（英文）Elucidation of the present-day phonological systems in Slavic languages

研究代表者

渡部 直也（Watabe, Naoya）

東京大学・大学院総合文化研究科・学術研究員

研究者番号：30846671

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：ロシア語・チェコ語・ポーランド語・ウクライナ語をはじめとしたスラヴ諸語における音韻体系について最新実態の解明を目指し、調査・分析を行った。

結果として、子音・母音の交替やアクセントについて、通言語的観点から踏まえた理論的な一般化がなされた。また、特に問題とされる、近年観察される発音のゆれや変化について、外来語の影響や語の使用頻度などが関連していることが明らかとなった。全体として、理論言語学に対する新たな知見が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義としては、先行研究で主張されてきた音韻理論に対して、スラヴ諸語の事例から新たな知見を提供し、音韻論研究ひいては理論言語学全体の発展に貢献した点が挙げられる。

社会的意義としては、日本では一般に注目度の高くない当該言語に対する研究を通じて、国際理解の向上を図り、多文化共生の基礎形成に貢献した点が挙げられる。特に近年のウクライナ危機を理解する上で、ウクライナ語とロシア語の共通性・多様性は重要な論点の一つである。

研究成果の概要（英文）：I conducted research on Slavic languages such as Russian, Czech, Polish and Ukrainian to elucidate the present-day phonological systems.

As a result, alternations of consonants and vowels and accentual patterns were theoretically generalized and formalized from a cross-linguistic viewpoint. Furthermore, it was argued that the influence of loanwords and word frequency are related to phonological variations and changes, which have been intensively discussed in recent studies. This study provided novel insight into theoretical linguistics.

研究分野：言語学

キーワード：言語学 音韻論 スラヴ語学 ウクライナ語 ロシア語

## 1. 研究開始当初の背景

人間言語の音韻的メカニズムを解明する研究の一環として、主としてスラヴ諸語を対象に調査・分析を進めてきた。同諸語の音韻体系については、比較言語学の枠組みで豊富な記述があり、理論的な考察もなされてきた。一方で、近年の実態としては、現象のゆれや変化が観察されており、それらの解明が求められている。

また、実在言語には音韻的要因以外の様々な要因が関連するため、一般の辞書に記述されている実在語の分析だけでなく、近年出現した新語・俗語や外来語の観察や、無意味語を用いた実験が必要とされる。新語・俗語や外来語、無意味語を対象とした研究は途上であり、学術的創造性が大きいと考えられる。

また、特に国内においてスラヴ諸語に関する研究は充分になされておらず、独自性も認められる。さらに、本研究によって得られた知見を、他の言語を対象とした研究と複合させることによって、音韻理論の研究全体の発展に寄与すると期待される。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、スラヴ諸語における音韻体系の最新動向を明らかにすることである。音韻的メカニズムを解明するとともに、実際の言語運用において音韻現象に影響を及ぼす諸要因を精査する。また、通言語的観点から考察を行い、スラヴ諸語に見られる音韻的普遍性および特異性を明らかにする。

## 3. 研究の方法

発音の表記された辞典や近年出版された新語・俗語辞典および大規模コーパスからデータを収集するとともに、母語話者を対象とした調査を行った。

得られたデータの整理・分析を行うとともに、データの分析結果に対して、関連研究を考慮した上で、理論的考察を始める。最新の研究動向を把握しながら、文献で扱われているスラヴ諸語以外の言語に対する分析を踏まえ、通言語的見地からの一般化を目指した。

## 4. 研究成果

### 【令和元年度】

ロシア語・チェコ語・ポーランド語における音韻現象について、数量的および理論的考察を行った。

ロシア語については、最新の外来語辞典からデータ収集し、母音[e]の直前における子音の軟子音化(口蓋化)の起こり方を考察した。その結果、従来軟子音化が回避できないとされた軟口蓋子音について、これまでの調査に引き続き、軟子音化回避の事例が増加していることがわかった。また、借用元の母音の質の影響も考察し、特に英語の広母音に由来する場合、ロシア語本来の[e]と区別される傾向が確認された。

チェコ語については、借用語における母音交替について、質的变化が回避される一方で、長さの変化は生じる傾向がわかった。特に動詞の派生については、無意味語を用いたパイロット調査を行ったところ、本来語と同様の短母音化が一定程度観察された。日本語の事例とも比較することで、母音の質などの分節音レヴェルにおける性質は本来の音韻的傾向と異なる一方で、母音の長さやアクセントといった韻律的性質は、当該語本来の音韻的傾向に従うと結論付けた。

ポーランド語については、閉音節における母音/o/が[u]に交替する現象について、辞典のデータから後続子音の質による影響を確認し、有声子音の直前で起こりやすいことが数量的に明らかとなった。一方で音声的に有声である鼻音の直前で同交替現象が完全に回避される点について、鼻音化した狭母音の回避が関係していることを指摘した。

### 【令和2年度】

スラヴ諸語における音韻の実態を解明する試みの一つとして、ロシア語におけるアクセントの「ゆれ」や通時的変化に焦点を当てた。

ロシア語では語のどの位置にもアクセントが現れうるが、分布としては特定のパターンが現れやすい。特に名詞については、一貫して語幹末に出現する語が大多数を占める。一方で、名詞や動詞の活用において、変化形によってアクセント位置が異なる語が一定数確認される。先行研究において指摘されている「ゆれ」ないし通時的変化の例としては、一部の男性名詞が複数各形において語幹から語尾にアクセントが移動する場合や、特定の動詞にお

いて現在形の一部で語尾から語幹にアクセントが移動する場合が挙げられる。

本研究ではまず、アクセントパターンが記述されている「文法辞典」からデータを収集した上で、語の音節数や使用頻度に基づいてパターンの分布を調査した。結果として、使用頻度の高い語について上述の現象が生じやすいことが明らかとなった。さらに名詞については、近年出版された発音辞典のデータと比較したところ、「専門的会話」において上記のゆれが現れやすいことがわかった。専門的会話においては特定の語の使用頻度が高まると考えられることから、語の使用頻度がアクセントパターンに影響を与えていることの裏付けが得られた。

なお、当該年度は新型コロナウイルスの流行による渡航制限のため、他のスラヴ諸語に関するデータ収集を行うことができなかった。

### 【令和3年度】

ロシア語のアクセントパターンについて、辞典をはじめとする文献から収集したデータを基に、分析・考察を行った。前年度の研究により、名詞のアクセントにおいて、使用頻度の高い語については活用形間で強勢位置の移動が生じやすいことがわかっていた。そこで、動詞の現在活用についても同様に、頻度辞典のデータを参考にしながらアクセントパターンを分類した結果、やはり頻度の高い語で強勢移動が起こりやすいということが明らかとなった。現象の一般化をある程度行った一方で、強勢移動そのものがどのような原理によって動機付けられるのかについては、疑問が残る。ロシア語における全体的な音韻法則のほかに、形態論的要因が関係している可能性を検討した。名詞と動詞とで異なるアクセントパターンが生じるのは、日本語や英語など、他言語でも観察される現象であり、ロシア語でも同様の現象が生じていることが示唆される。

さらに昨年度からの継続で、ロシア語における新語形成を考察する一環として、近年特にインターネット上で見られるようになった日本語由来の借用語を対象に研究を進めた。先行研究や以前の自身の研究において、外来の語彙がロシア語本来の語形成過程を経ることで、様々な語が派生する例が確認されていたが、日本語由来の語についても、一定のコミュニティ（アニメやゲームの愛好者など）においてはそうした派生語が用いられることがわかった。

また理論研究の一環として、言語データを正しく予測できるモデルの構築を引き続き模索した。

### 【令和4年度】

前年度に続き、ロシア語のアクセントパターンの変異について考察を進めた。動詞のアクセントについては、名詞のアクセントと同様に、使用頻度の高い語において移動アクセントが生じやすい傾向が確認された一方で、活用パターンによるアクセントの差異も重要であることがわかった。

次に、ウクライナ語の母音交替について分析した。同言語では、開音節の[e, o]が閉音節では[i]に交替する現象（以下、高段化とする）が特徴的である。現象の生じ方にはゆれが見られるが、調査の結果、頻度の高い語で交替が生じやすいことが判明し、先行研究で指摘されてきた傾向と合致した。さらに、母音削除が生じている場合について、ほとんどの場合は閉音節で[e, o]が観察され、高段化も同時に生じたと考えられる[i]の表出は例が非常に少なかった。こうした状況について、主に言語獲得の観点から、音韻現象の要因が何らかの形で表出することが求められることを主張した。

このほか、感染症の影響で遅れていた、ポーランド語・チェコ語などに関する資料収集を行った。また、令和4年2月に始まったロシアによるウクライナ全面侵攻以降におけるウクライナ国民の避難による言語状況の変化についても調査を開始した。

研究期間全体を通じて、言語データを正しく予測できるモデルを構築してきた。特に語の使用頻度が及ぼす影響について考察し、頻度の高い語彙は「中心的」に位置付けられ、有標なパターンが回避されやすい一方で、頻度の低い「周辺的」な語彙については音交替を禁じる制約が優先されるものと論じた。さらに、表層における音形から音韻現象が説明できない「不透明性」についても議論を進め、理論上は可能であるが回避される傾向を指摘した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 渡部直也	4. 巻 26
2. 論文標題 ウクライナ語母音交替における「透明性」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 音韻研究	6. 最初と最後の頁 71-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Watabe, Naoya	4. 巻 26
2. 論文標題 Vowel Length Alternations in Czech Diminutive Derivation	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Formal Approaches to Slavic Linguistics	6. 最初と最後の頁 457-474
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 渡部直也	4. 巻 30
2. 論文標題 ロシア語男性名詞のアクセントパターンについて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ロシア語研究	6. 最初と最後の頁 3-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡部直也	4. 巻 23
2. 論文標題 チェコ語の借用語における母音交替 日本語との対照を通じて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 音韻研究	6. 最初と最後の頁 19-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Watabe, Naoya
2. 発表標題 Frequency and markedness in Russian verbal stress
3. 学会等名 The 14th European Conference on Formal Description of Slavic Languages (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Watabe, Naoya
2. 発表標題 Vowel Length Alternations in Czech Loanword Morphology
3. 学会等名 音韻論フォーラム2019
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Watabe, Naoya
2. 発表標題 Phonological and phonetic voice in Polish vowel raising
3. 学会等名 The 14th meeting of Slavic Linguistics Society (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡部直也
2. 発表標題 英語からの[ae]の受容：日本語とロシア語の比較
3. 学会等名 Prosody & Grammar Festa 4
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------